The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
2001, Vol.3, No.1, 75-92

ISSN 1344-7505

ドイツ語における「テーマ・レーマ関係」の析出
——テクスト言語学に寄せて——

山本　務

Analisierung der Thema/Rhema – Korrelation der deutschen Sprache

Tsutomu YAMAMOTO

Resümee

Bekanntlich ist die Sprache eine zeitlich – linearer Abfolge. Diese Linialität bildet nichts anders als eine Reihe oder eine Reihung. Gleichwohl leistet die denkende Sprache gegen die Reihung und läuftet sozusagen "stufenweise": zum Beispiel 《Wenn/dann – Sätze》 oder 《Wer/dem(den) – Sätze》. Durch die Entdeckung einer Stufe oder Stufung könnte man ein Vorfeldbesetzungswort analysieren.

Im Unterschied zu der englischen Sprache und der französischen Sprache ist ein Subjektwort der deutschen Sprache nie zur Vorfeldbesetzung bestimmt. Das Vorfeld ist doch ein Freiraum. Daraus folgt "Anything goes" nie.

Thema/Rhema – Gliederung, ein der Grundbegriffe in der Linguistik, besonders in der Textgrammatik, trägt dazu bei, die Eigentümlichkeit des Vorfeldbesetzungsglieds dadurch zu analysieren, daß der Begriff zwischen einem Minimum der Auffälligkei und einem Maximum der Auffälligkeit unterscheidet. 〈BEKANNT〉 oder 〈GEGEBEN〉 ist thematisch; rhematisch ist 〈UNBEKANNT〉 oder 〈INNOVATIV〉.

要　約

周知のように二十世紀言語学はソシュールの発見以来、言語が「時間的に一次元の継起物」であることを踏まえる。そのまぎれもない「列状態」に対して、しかし言語は「層」を形成することによって「抵抗」する。この「層・成層・階段・段々」が、かの次元に重畳することを発見することによって、例えばドイツ語の「文頭語」の性質も究明出来る。

ドイツ語の「文頭」「前域」は、英語やフランス語と違って「主語」を指定しない。自由な空位空間である。ということは、「何でもよい」語句が言えるということではなく、また、たんなる「強調」を示すばかりでもない。また、「併行配列法」の濃厚な日本語とも異なって、「交錯配列法」を特徴とする語順を形成し、それは、テクスト性の形成に大いに寄与するものである。

言語学、特にテクスト文法の基礎概念のひとつである「テーマ・レーマ関係」は、「際立ちの最小限」例えば《es》と「際立ちの最大限」例えば《das》との間を区別することによって、文頭語の特徴を解明することに寄与する。「既知、所与」ということが「テーマ的」であり、「未知」「革新的」ということが「レーマ的」である。

Keywords: Thema/Rhema – Korrelation (テーマ・レーマ関係), Reihe und Stufe (列と層), die Roll – Bedeutng des Vorfeldbesetzungsglied (文頭語の役割意義), thematisch (テーマ的), rhematisch (レーマ的), Thema – Phi(ϕ) Theorie (新規のテーマ不在理論)

はじめに

英語を第一外国語とする日本でドイツ語教育にたずさわる者なら誰しも経験することであろうが、しかし、そこから仲々脱却しにくい隘路が存在する。それが、文頭語の問題である。例えば、「私は目下長編小説を読んでいる。著者を直接知っているのだ」という日本語を独作文練習する際に、例えば：

Ich lese gerade einen Roman. Ich kenne den Verfasser persönlich/Ich kenne persönlich den Verfasser.

という答案例をほとんどの者が見ることであろう。第二番目の文が、「主語・述語（主語・動詞）」という形なのである。これはまぎれもなく、英語による「語順の固定化」が背景に働いており、それによる「刷り込み」が機能しているのであろう。しかしこれではドイツ語の魅力は、半減するものであり、その力動的な世界は、永遠に開かれないままである。

"Ich lese gerade einen Roman. Den Verfasser kenne ich persönlich." という「正解」の文を前提して、"den Verfasser" を文頭に出すように、という指導を与えた場合でも、それが可能となるのは、額に脂汗を流すほどの苦痛を要するようである。その「枷」となっているものは何であるか。ここには、言語学習における「文化変容」という興味深い現象が潜んでおり、それ自体として究明の対象として追求しなければならないほどの問題がひそんでいるようである。つまり、日本語を母国語とした場合、その母国語の性質、おそらくは、「語順」に関して、あるいは、「情報伝達と教示」に関して、もっと言えば、思考様式において、「並列、併行、併置関係」(Nebeneinander) が勝っているということ、このことも関わってくるであろう。しかし、これは、また別問題としよう。

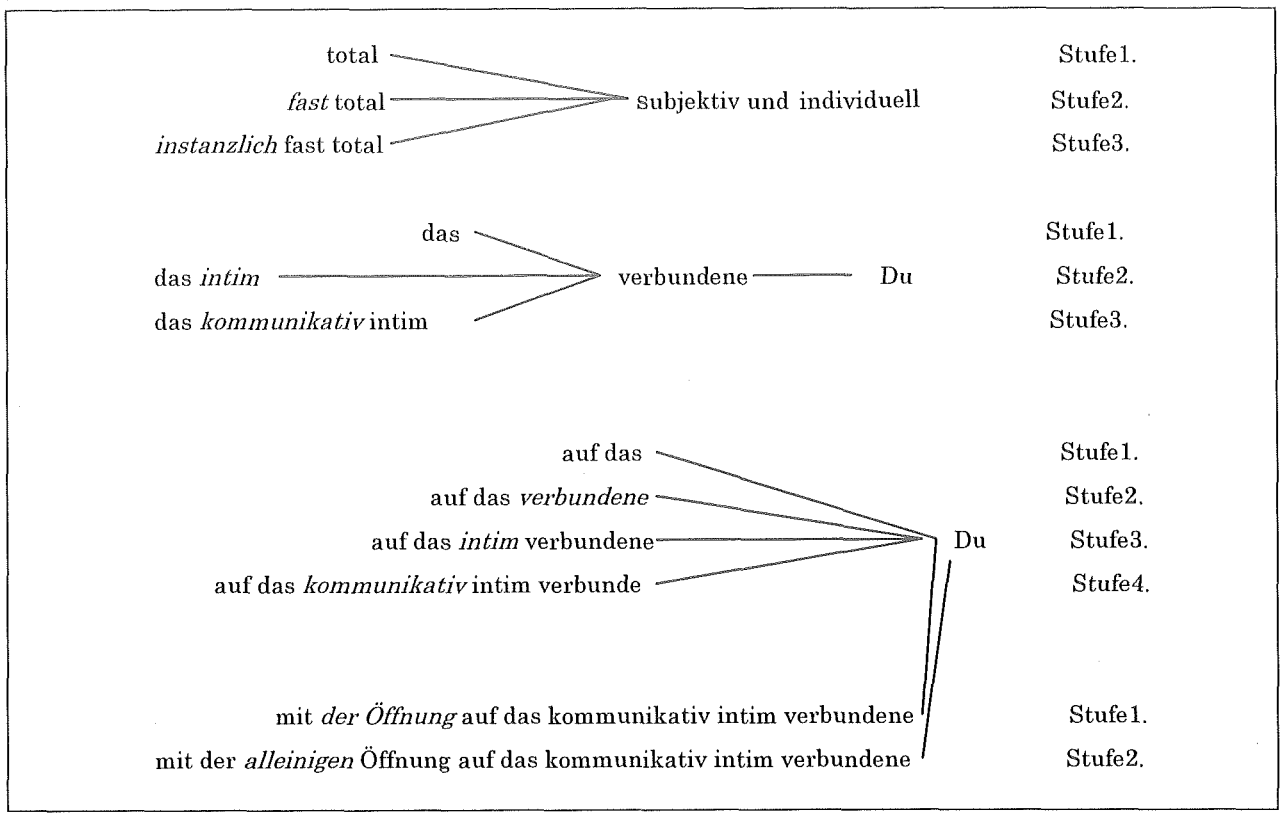
学習の初級段階ならば、「定動詞第二位の原則」と「枠構造」という構文把握のために、「文頭に主語以外の語句を言う場合には、定動詞第二位の原則に従って、倒置法となる」ということを教示するために、文頭に軽い語句を言うこともまた許されるであろう。事実、日本だけではなく、フランスのドイツ語教科書、たとえば、Larousse: *Aide Memoire ALLMAND 1998* を一瞥しても、事情は同じである。本稿では、ドイツ語教育のうえでも「盲点」となって、従来は、ほとんど取り上げられることのなかった「文頭にはどのような性質の語句を言うのか」ということの究明のために、「層」の素朴な形態として、「テーマ・レーマ関係」という考え方を導入する。そして、そこから始まり、同時に言語における「層」という存在の共有を一般化し、さらに、文頭語以外にも、「テーマ・レーマ関係」を優れて言語形態として顕在的、潜在的に明示する「構文」を析出する。

I　言語学の基礎概念の導入

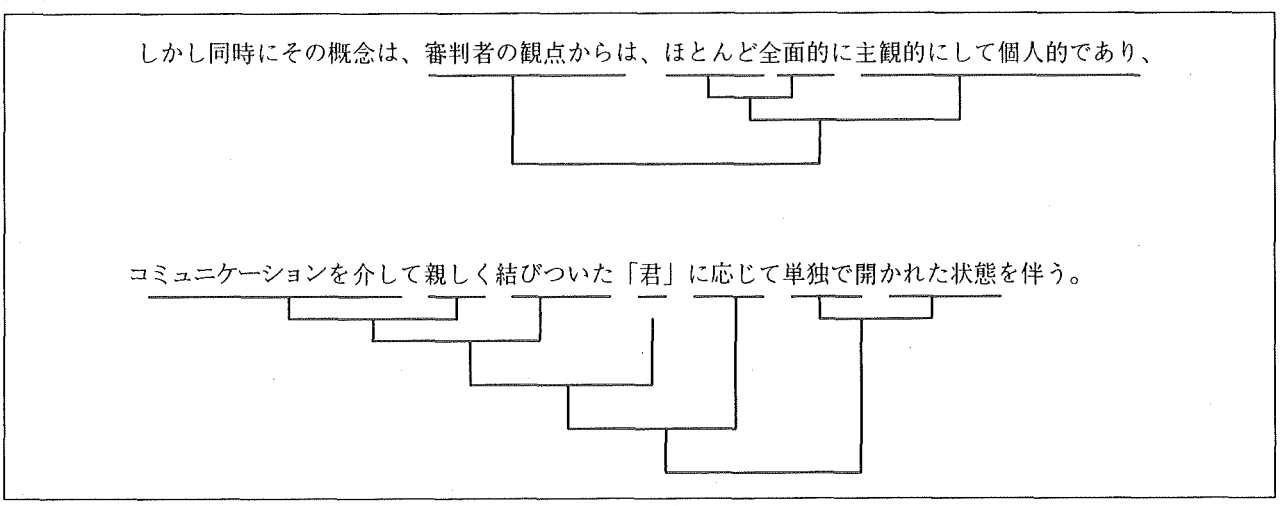
1．「言語」の「線条性」は「列状態」を形成するが、しかし、「層」の積み重ねが捉え返されなければならない――「層」の発見、「層」の導出：言語は「時間的にリニアーである」にもかかわらず、「列」だけではなく、「層」を形成する：

Jaspers' Begriff der moralischen Schuld ist in seiner Reichweite universal, das heisst er anerkennt kein Handeln des einzelnen, auch nicht das Handeln auf Befehl, das der Gewissensprüfung nicht unterstellt wäre. Zugleich aber ist er instanzlich fast total subjektiv und individuell, mit der alleinigen Öffnung auf das kommunikativ intim verbundene Du. (Hans Saner:*Einsamkeit und Kommunikation. Essays zur Geschichte des Denkens*, Lenos 1994, S.133)（ヤスパースによる道義的な罪という概念はその射程距離が普遍的である、ということはつまり、その概念は、たとえ命令に基づいた行為であるにせよ、良心の検証に服さないであろう、個々人のいかなる行為も承認しないということである。同時にしかし、それは、審判者としては、ほとんど全面的に主体的にして個人的なものであり、コミュニケーションによって親しく結びついた「君」に向けて単独のまま開かれている状態を伴っている。ハンス・ザーナー）

図解（1）

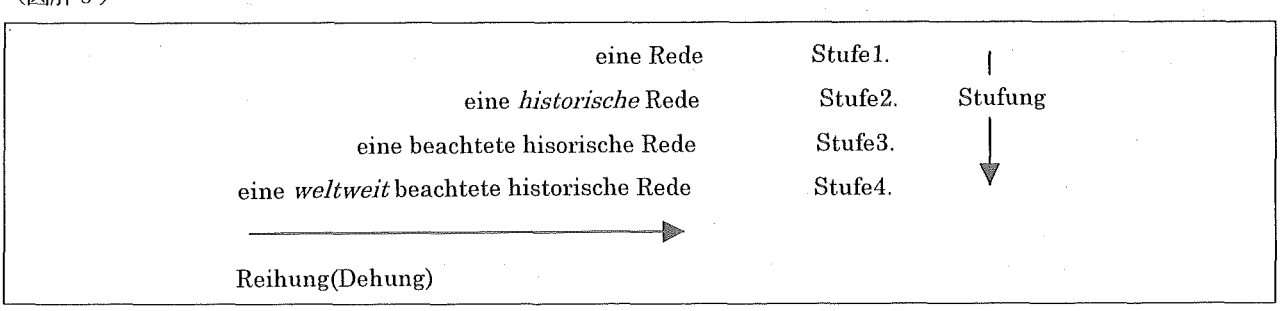


図解（2）



試みに、呈示した「図解(1)(2)」であるが、ここで日本語の「棚田」のように作られるものは、いったいなにか、という問題である。ドイツ語の場合、比較的に明瞭に読み取れるものとして、「列」に対する「層」の存在がある。さらに次の、ドイツ語に顕著な「冠飾句」の場合「図解(3)」を見てみよう。

（図解３）



この場合、イタリック体で示した語句が新たに付加されるものである。新たにその都度付加されること、そのことに注目して、やはり、これを「段階的に」(stufenweise) すすむものと考えて、我々は、「段階1」「段階2」「段階3」と呼称し、総じて「列」に対応する「層・成層・階段・段々」(Stufe; Stufung) の存在を発見する。言うまでもなく、そのつどの「層」の付加によって、「列」は延長する。そして言語が一次元の形態をなしている以上、「列」となって延長の度合いは強度を増してゆく。

次に、「刻み目」ということを考える：

In der Welt zu leben ist gefährlich, wegen derer, die das Böse tun, sondern wegen derer, die zusehen und geschehen lassen. (Einstein)

日本語：この世で生きて行くことがそれだけで 他者に対して脅威を及ぼすのは、悪いことをしでかす輩がいるからではなく、見て見ぬ振りをし、起きるがままに黙認放置する輩がいるからである。

言語は総じて、「話題」とそれに対する「コメント」という二つの部分に分たれるという驚嘆すべき性質をもつ。あるいは、「主題部」と「展開部」という二つの部分へと分たれるというプリミティーフな性質をもつ。我々の文例の場合、どこまでが「主題部」であり、どこからが「展開部」であるのかという問いに対して、三つの見解が得られるであろう。その「主題部」と「展開部」とが踵を接する部分に「刻み目」を入れると、三つが可能である。もっとも大きな「主題部」ともっとも大きな「展開部」はどれであるかに対して、大方は、(2) の箇所を挙げるであろうが、しかし (1) にあって既に「主題」と「展開」は始まっており、(3) にあっても「主題」を豊かに大きくとり、「展開」は、最重要箇所であるとみることも可能である。この事情を「図解」すると、つぎのようになる：

(図解4)

(1) (2) (3)

In der Welt zu leben ist | gefährlich, | nicht wegen derer,die das Böse tun | ,sondern wegen derer,die zusehen und geschehen lassen.

(1) (2)

この世で生きることは、それだけで他者への脅威を及ぼす|が、それは、|悪をしでかす輩がいるからではなく、|悪を傍観し成り行き任せに放置する輩がいるからである。

(3)

こうしてみると、「刻み目」とは、「成層」に照応するものであり、「成層」を感知する能力が言語能力の機能であったことが判明する。こうして、「主題部」を「テーマ」と呼び、「展開部」を「レーマ」と呼び、「既知」と「未知」との両極に相渉る「際立ち」の「諸層」、重畳を想定することが出来る。「テーマ・レーマ」をもっとも普遍的に定義したものとして、我々は既にハラルト・ヴァインリヒの定義を持っている。

2.「テーマ・レーマ・関係」の定義の試み

テクストはもちろん、聞き手をより低い情報からより高い情報へと導く情報量を表現する。一次元の進行中にどこかで、例えばテクストの中ほどで、観察位置をとると、聞き手は、この時点までにすでに一定の情報量を得ている。そのすでに得ていて理解されている情報のことを、「テーマ」と呼び、さらに先のテクストが与える、加えられてくる情報は「レーマ」としてテーマに加えられる。テーマとはしたがって、そのつど与えられる (gegeben) 情報であり、レーマとは、新たに加えられる革新的な (innovativ) 情報である。そして実践的には、いかなる文も、もっとも大きいテーマと、もっとも大きいレーマをもつ。その絶好の観察位置に、「|」を入れてみると、上のようになっていたのである。

II. 分析対象の析出

(a) Herr Sugimoto ist ein origineller Kerl. Aber wir sind doch auch originell.

(b) Herr sugimoto ist ein origineller Kerl. Aber originell sind doch auch wir.

(a) 杉本さんも、変わった人だ。尤も我々も、相当に変わっているけどね。

(b) 杉本さんも、変わった人だ。尤も変わっていると言えば、我々だって相当変わっているけどね。

「定動詞第二位の原則」に応じて、「倒置法」が働き、(b) の文が生れる。もちろん双方は異なった意味であるが、どのように異なっていると、解明するのか。テーマとレーマとを指摘すると、次のようになる：

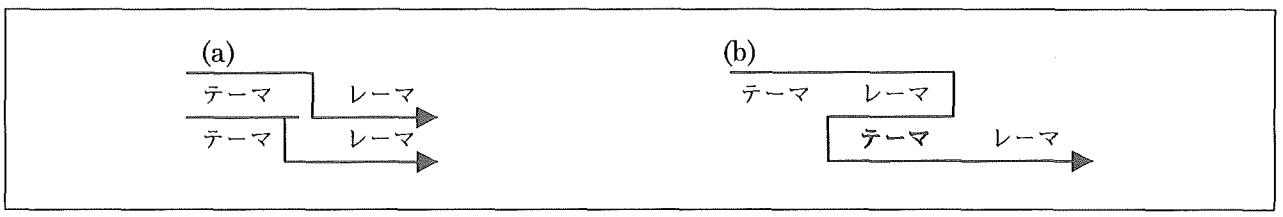
Herr sugimoto ist ein origineller Kerl.
(THEMA) (RHEMA)
Aber wir sind doch auch originell.
(THEMA) (RHEMA)

(b) は、やはり、次のようになるであろうか：

Herr Sugimoto ist ein origineller kerl.
(THEMA) (RHEMA)
Aber originell sind doch auch wir.
(THEMA) (RHEMA)

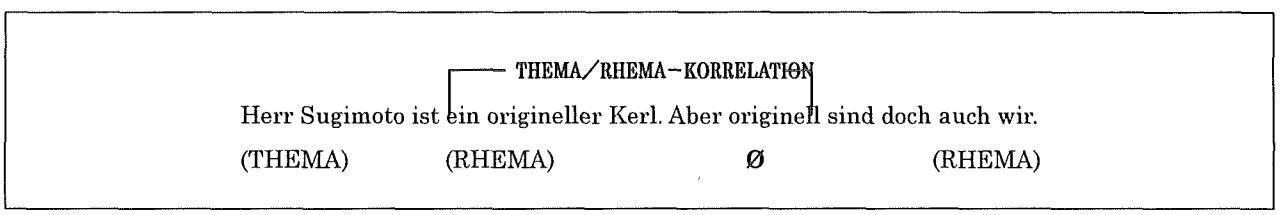
二番目の冒頭 originell は、一番目の ein origineller Kerl に含まれる originell を引き継いで「テーマ」としたものであり、その意味では、新規の「テーマ」ではない。したがって、同等に扱うわけにはゆかない。

（図解 5）



(b) は、先行文の「レーマ」を引き継いで、改めて――新規ではなく――「テーマ」として再設定しているわけである。そこで、このあり方を「関係概念」として確保して、「テーマ・レーマ関係」と呼ぶことにし、同時に、新規の「テーマ」の「欠如・不在」に注意を促すために、「ϕ」記号でもってこれを表示する：

（図解 6）



ここで析出された「テーマ・レーマ関係」が、本稿の分析対象に他ならない。先に言語学の基礎概念のひとつとして導入した「層・成層」、これの、ある意味で最も素朴な、つまり一つの「層」として存在する言語形態である。ところで、こういった文頭語として「層」を成す言語として、総じてどのようなものが存在するのだろうか、さしあたり、次に挙げる文例から析出してみたい。

Was die kleine Momo konnte wie kein anderer, das war: zuhören. Das ist doch nichts Besonderes, wird nun vielleicht mancher Leser sagen, zuhören kann doch jeder. aber das ist ein Irrtum. Wirklich zuhören können nur wenige Menschen. (Ende: *Momo* 1973. S.15) (小さなモーモが他の誰よりも出来たこと、それは他でもない、人の話しをよく聞くということであった。そんなことは何も格別なことではないと、多くの読者は言うことであろう。人の話しをよく聞くということは、誰だって出来ることなのだから。しかし、その意見は間違っている。本当に人の話しをよく聞くことの出来るのは、ごく少数の人に限られているからだ。エンデ)

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
Was die kleine Momo konnte wie kein anderer,		
	das war	
	:	
	zuhören.	
ϕ	**Das ist**	doch nichts Besonderes.
ϕ	**Zuhören kann doch**	jeder.
ϕ	Aber **das ist**	ein Irrtum.
ϕ	**Wirklich zuhören können**	nur wenige Menschen.

：Was---,dasによって明示的に「テーマ・レーマ関係の構築」である。しかも、das warの後に「二重点」をおいて「改まって」いる。この「二重点」も「テーマ・レーマ」の呈示。次の不定法名詞がくっきりと輪郭を伴って導かれる。そして、このZuhörenをめぐって「これは特別なことではない」という反論、さらにその反論に対して、「あやまりだ」という規定、最後に、wirklichを「新規な」とみなすべきか否か、考える余地があるが、ここでは、「新規のテーマ」は「不在」だと考える。

「テーマ・レーマ関係」を形成する語句として、次のようなものがここから析出された：

◗Was　　das ◗das ◗不定形動詞（助動詞構文）
◗指示代名詞（「焦点代名詞」）◗不定形動詞（助動詞構文）

「テーマ・レーマ関係」をすぐれて明示的に示しているのは、was / dasであるが、しかし、他の場合も、以上のように「テーマ・レーマ関係」を析出可能である。以下、「テーマ・レーマ関係」が析出可能なほど顕著である言語形態を、ドイツ語のなかから抽出して、取り上げてゆきたい。

Ⅲ.

1. wenn／dann(so); als／da

Vor dem Hintergrund dieser Auffassung erhält die von Jaspers vorgenommene Unterscheidung zwischen "Kollektiv – Verantwortlichkeit" und "Kollektiv – Schuld" der Deutschen eher semantischen Charakter. **Wenn** jeder Bürger nachträglich für die Folgen staatlicher Handlungen während der NS-Zeit haften und die Verantwortung übernehmen sollte, ***dann impliziert dies*** *zugleich,daß* die Schuld für die Ursache der Haftung anerkannt wird. (Ralf Kadereit: *Karl Jaspers*, 1998, S.24)

Wenn wir Deutschen solche Signale in Richtung auf das ganze Europa setzen, **dann** geschieht **dies** in der festen Verbindung mit dem Westen. (Weizsacker 1990)

2. wer／der, was／das, wo／dort

Wen Gott sterben lassen will, ***der*** soll sterben dürfen.（神の思し召しで死ぬ人間は、死ぬことを許されるべきだ）

：《wer》は、情報輪郭が最小限の際立ちであり、《der》は、情報輪郭が最大限の際立ちである。

Was wir tun, ***(das)*** wird nie verstanden, sondern immer gelobt oder getadelt. (Nietzsche)（私たちがなすこと、そのことは決して理解されることはなく、いつだって誉められるか貶されるかである。ニーチェ）

Die englische Welt dachte in Stützpunkten und Verkehrslinien. **Was** für die andern Völker Boden und Heimat war, ***(das)*** erschien ihr als bloßes Hinterland. (Carl Schmitt: *Land und Meer*)（イギリス世界は、拠点と交通路線でものを考えた。自余の諸民族にとって基盤であり故郷であったもの、そのものは、イギリス世界には、たんなる後背地・背後に退いてゆく地でしかなかった。カール・シュミット『陸と海と』）

3. 文頭語の考察

3. 1 先行語の反復

文例：Was hast du den ganzen Tag gemacht?
——Gearbeitet.
——Gearbeitet(habe ich den ganzen Tag).
Was möchtest du jetzt?
——Mich ausrufen.
——Mich ausrufen(möchte ich).
（一日中何をしてた？——勉強してた。これからどうするの？——休養を）

：「ディアローク」の問いと答えの場合、答えにあっては、新情報として、「レーマ」のみが呈示される。「過去分詞」一語などで、これでもって十分テクストは、成立する。省略可能の箇所が「テーマ・レーマ関係」である。

文例：Wohnung? Wohnung habe ich noch keine gefunden und gekauft.（住まいですか？住まいならまだ見つけておらず、買ってもいないのです）
：問いかけを確認して、文頭語で反復する。

文例：Du hast dich unser Verbrechen teilhaft gemacht. ——Ob ich mich Ihrer Verbrechen teilhaft gemacht? Durch was? ——Dadurch,daß du dazu geschwiegen hast.（君は我々の犯罪に一部加担したんだ。——私があなた方の犯罪に一部加担したって？どういうことで？——君がそれに対して沈黙を守っていたことによってさ）
：“Ob” による聞き返しでは、新情報としての「レーマ」は、文末の疑問符 “?” だけである。
文例：
Der Bundeskanzler wird auf Vorschlag des Bundespräsidenten vom Bundestage ohne Aussprache gewählt. Gewählt ist, wer die Stimmen der Mehrheit der Mitglieder des Bundestages auf sich vereinigt. Der Gewählte ist vom Bundespräsidenten zu ernennen. (Das Grundgesetz der BRD, Art. 63)（ドイツ連邦国首相は、大統領による提案に応じて連邦議会によって討議なしで選出される。連邦議会成員の過半数の投票を得る者が選出されることになる。選出された者は、大統領によって任命される。ドイツ基本法）

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
Der Bundeskanzler		wird auf dem Vorschlag des Bundespräsidenten ohne Aussprache **gewählt**.
ϕ	**Gewählt ist,**	wer die Stimmen der Mehrheit der Mitglieder des Bundestages auf sich vereinigt.
ϕ	**Der Gewählte ist**	vom Bundespräsidenten zu ernennen.

：第二番目の「選出されている Gewählt ist」は、第一番目の文末「選出される gewählt werden」を継続話題として再設定したものであり、「テーマ・レーマ関係」を示す。新規の「テーマ」ではなく、従って、新規の「テーマ」は不在である。「選出される gewählt」は、前者では、“werden” とともに「出来事受動態 Vorgang－Passiv」によって「いつでも繰り返し、あるいは、今にも」出来事として生じることとして提起され、これを受けて、後者では、「状態受動態 Zustand－Passiv」として「確認・確定」の “sein (ist)” とともに、「出来事の結果」としての「状態」が提起される。「過去分詞 gewählt」はこうして、その一部分の意味（「出来事」）と、その一部分の意味（「状態」）とがともに表出されて、十全の意味完成を遂行する。「レーマ」は、「関係代名詞 wer」によって呈示されている。

第三番目の文頭語は、もちろん新規の「テーマ」であるわけがなく、「こうした手続きによって選出された者が」の意味である。（原文には「こうした手続きによって」は書かれていないが。）したがって、「テーマ・レーマ関係」を構築しており、したがってまた、新規の「テーマ」は、依然として「不在・欠如」であった。

“Es ist das notwendige Schicksal der asiatischen Reiche, den Europäiern unterwerfen zu sein, und China wird sich auch einmal diesen Schicksal fügen müssen.” (G.W.F. Hegel) Eine Fügung ist dies aber auch dann, wenn sich der Osten nicht unterwirft, sondern von sich aus den Geist der mod-

ernen Europas aufnimmt und sich damit gegen den Westen wendet. (Karl Löwith: *Ost und West*)
(「ヨーロッパ人に屈服することはアジアの諸帝国の必然的な運命である。中国もまた一度は、この運命に神の摂理として従わざるを得ないであろう」と、ヘーゲルは言った。運命と言うならば、次のこと、つまり、東洋が屈服するのではなく、みずからすすんで近代ヨーロッパの精神を担い、西洋に立ち向かうとき、このこともまた運命である。カール・レーヴィット)

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
Es ist		das notwendige Schicksal der asiatischen Reiche den Europäiern unterwerfen zu sein
Und China		wird sich auch einmal diesen Schicksal **fügen** müssen.
ϕ	**Eine Fügung ist dies aber auch dann,**	**wenn** sich der O.nicht unterwirft,sondern von sich aus den G.der modernen Europas aufnimmt und sich damit gegen d.W.wendet.

：“Es / zu sein” は、従来の文法では「仮主語・形式主語」「不定詞」であったが、テクスト文法では、「地平 HORIZONT の es」と「焦点 FOKUS」関係として命名し直される——これは、後述の予定。先行の「レーマ」である「運命に摂理として従う」(fügen) を話題として引き取って、次の文頭に再設定して “Eine Fugung” を打ち出しているが、これはしたがって、新規の「テーマ」ではなくして、「テーマ・レーマ関係」の導入である。“dann,wenn” によって、「レーマ」は “wenn” が担うことになる。その「レーマ」は、「東洋がヘーゲルの言ったように西洋に屈服するのではなく、近代西欧の精神を自主的に摂取し西洋に立ち向かうとき」と、筆者レーヴィットの新知見が提起される。ということは、「運命に従う摂理」ということが、ヘーゲルとレーヴィットにおいて「意味転換」されていることでもある。こうして、先行「レーマ」を「テーマ・レーマ関係」へと再設定することにより、たんなる「註釈」にとどまらない「先行語句の意味転換」という文脈が形成される。

Ich bin nur für den Transport verantwortlich gewesen, ich habe nicht den Zielbahnhof bestimmt, ich habe die Leute nur zu einem bestimmten Ort gebracht,ich habe nie jemanden getötet, getötet haben nur die anderen, ich bin für die Toten nicht verantwortlich. (Eichmann, aus: *Die ZEIT* v.11.2.1999) (「私は移送に対してだけしか責任がありませんでした、私が目標の駅を決めたわけではありません、私は人々をただ特定の場所に運んだだけのことであり、私は誰かを殺したわけではありません、他の人たちが殺したのであり、私は死者に対して責任はありません。アイヒマン」)

Das Ende des Kieges bedeutete für die meisten Bewohner der drei Westzonen eine Erlösung, mithin fühlten sie sich, ohne weiter drüben nachzudenken, “befreit”. Nicht befreit fühlten sich die Bewohner der sowjetische besetzte Zone, und sie hatten auch keinen Grund dazu. Weitere Millionen erlebten das Kriegsende inmitten eines unmenschlichen und freiwilligen “Transfers”. Sie waren vertrieben worden und mußten sich das Gefühl der Freiheit und Befreiung erst im Lauf der Jahre zulegen. Das Thema Befreiung war damals keines. Noch zum 8. Mai 1965 weigerte sich Adenauers Moskauer Lieblingsbotschafter, Hans Kroll, auf die Befreiung zu trinken. Ein Deutscher könne doch nicht “auf die eigene Niederlage trinken”. (Rudorf Augstein:*Politik der Erinnerung*, in: DER SPIEGEL v.Nr.19,8.5.1995)
(戦争の終結は、三つの西側区域の住民にとっては、救いであり、従ってまた、彼らは、このことに関してさらにそれ以上は思索することなく、自分たちが「解放された」ように感じた。解放されなかったと感じたのは、ソヴィエト占領区域の住民であり、彼らがそう感じるだけの根拠も持たなかった。それ以外にまた何百万人もの人々が、終戦を非人間的で恣意的な「移送」の真っ只中で体験した。彼らは追放されていたのであり、自由と解放の感情を得たのは、時の経過のなかでようやくのことであった。「解放」という主題は、当時主題ではなかった。１９６５年５月８日でもまだ、アーデナウアーがひいきにするモスクワの外交官ハンス・クロールは、「解放」のために乾杯

することを拒んだ。或るドイツ人は、「自国の敗戦のために乾杯する」ことは出来ないと言うのだ。アウクシュタイン)

Ich bin fünfundzwanzig Jahre alt, und von zwei Männern wurde ich stehengelasen. Stehengelassen wie ein Schirm, den man ansichtlich irgendwo vergißt. (Erich Kästner) (私は二十五歳ですが、二人の男から置き去りにされたわ。わざと置き忘れる傘のように置き去りに。エーリッヒ・ケストナー)

1. Ich habe		nie jemanden **getötet**,
ϕ	**getötet haben**	nur die anderen.
2. Mithin fühlten sie,		ohne weiter drüben nachzudenken, **"befreit"**.
ϕ	**Nicht befreit fühlten sich**	die Bewohner der s. besetzte Zone.
3. Ich bin		fünfundzwanzig Jahre alt,
und von zwei Männern wurde ich		**stehengelassen**.
ϕ	**Stehengelassen**	wie ein Schirm, den man ansichtlich irgendwo vergißt.

：分析文例1は、ユダヤ移送計画の立案者アイヒマンのイスラエル法廷での至言として知られ、かつ「悪の凡庸さ」「考えないことの罪」(ハンナ・アーレント)として、現代の「机上の殺人者」「官僚体制による殺人」の問題として重要視されてきたものである。殺人への直接関与という意味で、アイヒマンは、「過去分詞」getötet、二つの単語を同一意味で使用している。もちろん、新規の「テーマ」は不在であり、「他の人たち」は、「レーマ」であって、しばしば伝統的な「主語・述語」の固定範疇でもって機械的に思い込まれるような「新規のテーマ」ではないのである。

文例2のテクストは、戦後ドイツの出発点の自己理解をめぐって「終戦日」が「敗戦の日」か「解放の日」かという争点に関するものである。これを受けた「主題・解放」に関するものが「テクスト」として選ばれているが、最初の「解放された」が「それ以上深く思索するものではない」という意味で括弧つきのものであり、次の「解放された」は否定の対象として、すすんで括弧はずしにより、使用。

文例3では、"Stehengelassen"が「テーマ・レーマ関係」として再設定されて、貴重な「意味の増幅」を成し遂げている。

3. 2 目的語もまた

《Es gibt **keine Kunst mehr.**》《Natürlich, John, gibt es noch Kunst. Es hat immer Kunst gegeben, solange Menschen existieren. Du hast einmal – es ist sehr lange her – auf der Rückfahrt von Maria Lach nach Frankfurt zu mir gesagt, **Kunst gibt** es schließlich in allen Ländern, und etwas anderes brauche ich nicht.》(Grete Weil: *Spätfolgen*)(「もう芸術は存在していない」。「もちろん、ジョン、まだ芸術は存在しているわ。人間が存在する限り、いつも芸術は存在してきた。あなたはかつて－もう随分前の事だけど－マーリア・ラーハからフランクフルトへの帰りに私に言ったことがあったわ。芸術は結局、すべての国々に存在している、他の何も、ぼくには必要ない、とね。グレーテ・ヴェイル」)

3. 3 「補語」を文頭に

Er kommt zu spät – unpünktlich war er immer. Ich bin unsicher, ob ich ihn erkennen werde nach all den Jahren. (Grete Weil: *Spätfolgen*, Fischer 1995)(彼は遅れてやって来る――時間どおりでないのは、相変わらずであった。グレーテ・ヴェイル)

Ein gewöhnlicher Verschender war er nicht, dazu hatte er zuviel Geld. (Hauptmann)(尋常の浪費家というわけではありませんでした。それにお金は、ありあまるほど持っていましたから。ハウプトマン)

Reich bin ich so gut wie ein Fürst.(金持ちという点では、私は王侯にひけをとらない)

Ich bin nicht gerade reich, aber arm bin ich deshalb noch lange nicht.(僕は別に金持ちというわけではありません。しかしそうかと言って、貧乏では決してありません)

Blau ist nicht nur die Blume der Romantiker. Blau gilt im Volksmund als die Farbe der Treue. Blau leuchtet auch der reine Himmel über der Bretagne, blau ist das unter weißen Schaumkronen tosende Meer, blau ist das Interieur der

Granithäuser von Saint Malo, die so manchem Sturm trotzen können.

Doch blau schimmert auch das eng anliegende samtene Kleid, mit dessen Kauf die junge Krankenpflegerin Viviane den ersten Schritt zum Ehebruch tut: Die Lüge scheint so blau wie die Treue, wie die Wahrhaftigkeit. Das Denken in polaren Begriffe wie wahr oder unwahr, treu oder untreu geht an der komplexen Wirklichkeit des menschlichen Innenlebens. (Karen Horn, in: *FAZ* v.11.8.1999) (青いのは、ロマン主義者の花ばかりではない。世間一般に青は、忠誠の色であり、ブリュターニュの空もまた青く輝き、白い泡立ちの下でごうごうと音を立てている海もまた青く、何度もの嵐に持ちこたえているサン・マロの大理石で出来た家屋のインテリアもまた、青い。

だが、若いヴィヴィアンが最初の不貞への一歩を踏み出す際に買った、ピッタリと身体に合った服もまた、青い光沢を放っている。うそは、忠誠と同じく、真実と同じく、青い色である。真実か真実でないか、忠誠か不実かという両極の思考は、人間の内面生活の複雑な現実をかすめてゆく。カーレン・ホルン)

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
ϕ	**Blau ist**	nicht nur die Blume der Romantiker.
ϕ	**Blau gilt**	im Volksmund als die Farbe der Treue.
ϕ	**Blau leuchtet**	auch der reine Himmel über der Bretagne,
	blau ist	das unter weißen Schaumkronen tosende Meer,
	blau ist	das Interieur der Granithäuser von Saint Malo, die so manchem Sturm trotzen können.
Doch	**blau schimmert**	auch das eng anliegende samtene Kleid,mit dessen Kauf die junge Viviane **den ersten Schritt zum Ehebruch tut.**

:

Die Lüge scheint so blau wie die Treue,wie die Wahrhaftigkeit.

Das Denken in polaren Begriffen wie wahr oder unwahr,treu oder untreu geht an der komplexen Wirklichkeit des menschlichen Innenlebens.

：最初からいきなり「テーマ・レーマ」関係が、「青い」に対して繰り出される。そして「Dochけれども」を「新規のテーマ」とみなすと、「二重点」の向こう岸に大きく「テーマ・レーマ関係」が登場であり、なぜ「青い」が問題であるのかが見えてくる。「テーマ・レーマ関係」の枚挙から抽象的な命題が登場するという論理展開である。

Ehrlich und aufrecht ist der Mensch im Verhalten zum anderen Menschen, und die hierin zielende Bewertung entspringt auch im Blick von außen her. Wahrhaftig aber ist der Mensch *vor sich selbst*. Wahrhaftigkeit ist eine Art, wie sich der Mensch zu sich selbst verhält. Darum genügt es auch nicht, die Wahrhaftigkeit als Übereinstimmung von Gesagtem und Gemeintem zu bezeichnen. Dafür würde bloße Ehrlichkeit genügen. Wahrhaftig ist ein Verhalten *erst, wo* sich der Mensch mit dem Mut des Bekenntnisses dahinterstellt. Und auch die Offenheit oder Echtheit eines Lebensausdrucks bedeuten noch keine Wahrhaftigkeit, denn der Ausdruck ist unbewußt. Auch eine ehrlich geaüßerte Überzeugung beweist noch keine Wahrhaftigkeit, sondern diese entspringt *erst da, wo* Offenheit und Echtheit dem Menschen zum frei gewählten Ziel werden. Wahrhaftigkeit ist die einem Widerstand abgenötigte Durchsichtigkeit eines Menschen für sich selbst. (Otto F.Bollnow: *Wahrheit und Wahrhaftigkeit*, in: Ulrich Wickert: *Das Buch der Tugenden*, Hoffmann und Campe 1995, S.242) (正直で真っ正直であるのは、人間の他の人間に対する振る舞いおいてのことであり、この点を目指す価値観は、外面の視線にもまた発生する。しかし真率であるのは、自己自身を前にしてのことである。真率さとは、人間が自己自身に対して振る舞うあり方の一種である。だからこそ真率さをして、言われたことと

考えられていることとの一致だと称することは未だ充分でもない。そういう一致のためならば、たんなる誠実さだけで充分であろう。或る振る舞いが真率であるのは、人間が告白の勇気をたずさえて背後に控えている場合に初めてである。人生表現が心を開いていることと純粋であることは、未だ真率さを意味するわけではない。というのも、この表現は、無意識なものであるから。誠実に表明された確信もまた、未だなんら真率さを証明するわけではなく、真率さが発生するのは、心が開かれていることと純粋であることが、当の人間にとって自由に選ばれた目標となる場合に初めてである。真率さとは、或る人間による、抵抗をかいくぐりながらの、自己自身に対する透明さである。オットー・ボルノー)

テーマ	テーマ・レーマ関係の明示	レーマ
ϕ	**Ehrlich und aufrecht ist der Mensch**	im Verhalten zum anderen Menschen
ϕ	**Wahrhaftig aber ist der Mensch**	vor sich selbst.
ϕ	**Wahrhaftigkeit ist**	eine Art,wie sich der Mensch zu sich selst.
ϕ	**Darum**	genügt es auch nicht, die W.als Ü.von G.u.G.zu bezeichnen.
ϕ	**Dafür**	würde bloße E.genügen.
ϕ	**Wahrhaftig ist ein Verhalten erst(dort),**	***wo*** sich der M.mit dem M.des B.dahinter stellt.
ϕ	**Diese entspringt erst da,**	***wo*** O. und E.dem M.zum frei gw. Z.werden.
	Wahrhaftigkeit ist	die einem Widerstand abgenötigte Durchsichtigkeit eines Menschen für sich selbst.

:"Wahrhaftig; Wahrhaftigkeit" の規定をめぐって "ehrlich, aufrecht, Offenheit, Echtheit" との対比によって、その本質規定が求められている。教育哲学者の手になるテクストである。第3の文と最後の文は、「倒置法」にあらざるものとして注目に値する。

3. 4 先行語の一部の意味を、反対語を

Der Kommunismus ist aber an der Vergeblichkeit dieses Versuches <u>gescheitert</u>. <u>Durchgesetzt</u> hat sich gegen die Anmaßung des Systems die geistige Freiheit des Menschen: die Person gegen das Kollektiv. (Weizsäcker 3.10.1990) (共産主義はしかし、この試みの空しさゆえに挫折しました。体制の尊大さに対して人間の精神的な自由が、つまり集団に対する人格的な個人が貫徹したのです。ヴァイツゼッカー)

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
Der Kommunismus		ist aber an der V.d.V. **gescheitert.**
ϕ	**Durchgesetzt**	hat sich gegen die Anmaßung des S. die geistige F.des M.
	: **die Person gegen das Kollektiv.**	

:「挫折する gescheitert」という先行「レーマ」を引き継いで、次の文頭には品詞として同じ「過去分詞」である「貫徹する durchgesetzt」を「テーマ・レーマ関係」の「緊張」を示すものとして呈示。「挫折 scheitern」に対する「貫徹 durchsetzten」という反対意味が対置され、新規の「テーマ」は「不在」であることが直ちに潜在的に示される。

Denn es war schließlich die Duldung durch die schweigende Mehrheit, die vor den Klagen der Gequälten Augen und Ohren verschloß, die Auschwitz ermöglicht hat oder doch zumindest die Durchführung der Endlösung im großen Maßstab. Die Wahrheit über die Vernichtungspläne der Nazis und die Wirklichkeit der Lager wurden immer wieder <u>verleugnet, bagatellisiert, heruntergespielt</u>, und <u>*wirklich zutage gekommen*</u> sind sie <u>erst bei Kriegsende</u>, <u>mehr als</u>

zwei lange Jahre nach der Verurteilung des Völkermords durch die Allierten im Dezember 1942. (Rony Brauman: *Hilfe als Spektakel. Das Beispiel Ruanda*, Rotbuch Verlag, 1995, S.25,26)（というのも、アウシュヴィッツを可能とさせたか、少なくとも、大規模の最終的解決の遂行を可能とさせたのは、最終的には、苦しむ人々の嘆きを前にして目を閉ざし耳を塞いだ沈黙する多数の人々による黙認であったからである。ナチスによる絶滅計画に関する真実性と収容所の現実性は繰り返し、否認され故意に些細なこととされ故意に過小評価され、それらが白日の下に明らかになったのは、ようやく終戦時の際であり、１９４２年１２月連合国による民族殺害の有罪判決以後二年以上経ってのちのことである。ロニー・ブローマン）

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
Die Wahrheit über die Vernichtungspläne der Nazis Und die Wirklichkeit der Lager		wurden immer wieder **verleugnet,bagatelliert,heuntergespielt**
ϕ	**und wirklich zutage gekommen sind sie**	
		erst bei Kriegsende,mehr als zwei langeJahre nach der Verurteilung des Völkermords durch die A. im 12.1942.

：先行の「レーマ」：「否認され、些細なこととされ、過小評価され」という「受動態・過去分詞」に対して「完了・過去分詞」が選択され、「白日の下にさらされる」という意味が「テーマ・レーマ関係」を打ち出している。もちろん「新規のテーマ」は不在である。どこまでが「テーマ・レーマ関係」としてみなされるべきかという問題が出て来るが、次の「レーマ」としては、erst以下として考えるのが妥当である。書き手・読み手にとって共通の地盤として「テーマ・レーマ関係」を確保しておいて、「ようやく」という「焦点詞の副詞」とともに、「レーマ」が悠揚迫ることなく、言い募られるのである。

Jeder ist mit seinem Gewissen allein. Doch diese Einsamkeit ist keine solipsistische, denn durch die innere Stimme des Gewissens verwandelt sich der Mensch in ein dialogisches Wesen. Conscientia heißt wörtlich: zusammenwissen; bei Thomas von Aquin bezieht sich das Wort auf die Zusammenführung des rationalen und des emotiven Wissens; späterer Etymologie zufolge verweist es auf das Zusammenwissen von Gott und Individuum. Ob die innere Gegenstimme auf Gott verweist oder ob sie das Sittengesetz verkörpert, ist nicht entscheidend; entscheidend ist allein, daß unter entsprechenden kultuellen Vorgaben jeder und jede in der Instanz des Gewissens eine normative Orientierung, notfalls auch gegen die Gesetze der Gesellschaft aufbauen kann. (Assmann, A. 1999, S.81)（誰もが、みずからの良心とともに孤独である。けれどもこの孤独は、独我論的なものではない。というのも、良心の内なる声を通じて人間は、対話をする存在へと変貌するからだ。「コンスキエンティア」とは文字どおり、併せて（ともに）知るという意味であり、トマス・アキナスの場合、この語は理性的にして感情的な知をともに営むということに関わり、もっと後年の語源的研究によれば、神と個人とを併せて知ることを指示参照する。内なる反逆の声が神を指示参照するのか、それとも、人倫の法則を体現するのかは、決定的なことではない、決定的なのは、ただひとつ、文化的な基準のもとで男女を問わず誰もが良心という審判において規範的な方向づけを、必要とあらば社会の諸法則に反してでも構築することが出来るということである。アスマン、A.）

テーマ	テーマ・レーマ	レーマ
1. Jeder ist		**mit seinem Gewisen allein.**
2. ϕ	Doch **diese Einsamkeit ist** denn **durch die innere Stimme des Gewissens**	keine solipsistische, verwandelt der Mensch in ein dialogisches Wesen.
3. Ob die innere Gegenstimme auf Gott verweist oder ob sie das Sittengesetzt verkörpert, ist	**entscheidend ist allein daß,**	nicht **entscheidend**; unter - - - -.

：分析文例1，2は、むしろ前の方で取り上げるべきものであったかもしれない。つまり、2は、1に対して、いわば自ら「テーマ・レーマ」の取り出しと抽出を遂行しているものである。その意味で本稿にとって極めて重要なものである。「誰もが自らの良心とともに孤独である」という命題呈示、そして、その命題に対して、二点を「孤独」、「良心の内なる声」を「テーマ・レーマ」として再設定して、「レーマ」的展開をしてみせている。分析文例3は、先行「レーマ」の引き取りとして非常によく見られる技法であり、次の文例も同じ性質のもの。

Ob einer seine Arbeit gern oder mit Liebe zur Sache tat, war unwichtig ——im Gegenteil, das hielt nur auf. **Wichtig** war ganz allein, daß er in möglichst kurzer Zeit möglichst viel arbeitete. (Ende)（自分の仕事を歓んでするのか、それとも仕事への愛情をもってするのかということは重要なことではなかった。それどころか反対に、そんなことは、仕事の邪魔になるだけだった。重要なことはただひとつ、出来る限り短い時間内で出来る限り多くの仕事をすることだったのだ。エンデ）

3. 5. 「認容文先行の場合は、力強い先置の言葉がふさわしい」（関口存男）

筆者の知る範囲では、関口存男の仕事のなかに、珍しく、この「テーマ・レーマ」への着眼がまとまったかたちでは見られない。そのなかで、この「認容文」との関わりでの註釈は、貴重である。文例も彼のもの：

科学は理性を満足させるかも知れぬが、気持ちはいささかも充たさない。

Die Wissenschaft mag die Vernunft befriedigen, ——**das Gemüt** läßt sie leer.

科学がなんといおうと、幽霊はじっさいにいるのだ。

Die Wissenschaft mag sagen, was sie will, **Gespenster** gibt es wirklich.

科学がたとえどんなにして掛っても、ひとつここにどうしても科学では説明できないことがある。

Die Wisenschaft mag sich anstellen wie sie will, **eins** kann man nie und nimmer begreiflich machen.

3. 6 不定形動詞を文頭に

Heiraten will er sie ***nicht***, das hat er ihr gesagt, wie könnte er auch, er ist ja verheiratet. Es ist ihr nicht recht. **Ein Kind** möchte sie von ihm haben. Ein Kind nach Ineko? Unmöglich. (Grete Weil: *Spätfolgen*, 1995)（彼女と結婚するということは彼は欲していない、このことを彼は告げた。どうしようもなく、彼はもう結婚しているのだから。それは彼女には解せない。子どものことを彼女は欲しがっているのだ。イーネコに似た子のこと？それは不可能である。グレーテ・ヴァイル）

Du must keineswegs, wenn du nicht magst. **Zwingen** will ich dich **nicht**.（したくないのなら、しなければならないことはないよ。無理強いするつもりはないのだから）

4. 指示代名詞（焦点代名詞）

Das Fußballspiel heute war wirklich sapannend. ——Doch, das muß man sagen.（今日のサッカーの試合は、ほんとうに面白かったわ。——そうだとも、そのとおりだ）

Er ist eine Feigling.——O, nicht doch, das dürfen Sir nicht sagen.（彼は臆病者だ。——いや、いや、そんなことを言ってはいけません）

Wollen Sie mit mir tanzen? ——Ich tanze sehr schlecht. Das glaube ich nicht. Doch, es ist wahr.（私と一緒に踊りません。——ダンスはとてもへたなんです。信じないわ。——いえ、ほんとうなのです）

5. 1 レーマとして「否定語」

次に、「テーマ・レーマ関係」を設定した後の「レーマ」を見てゆきたい。どのような語句が好んで使用されるのかという問題である。

文例：

Vom Gewissen frißt man **nicht**.（良心では食ってはゆけない）

Ich war in Auschwitz, in Majdaneck, ich war in Sobibor, nur nach Treblinka bin ich **nie** gegangen. Mein Vater wurde dort gemordet. (Ignatz Bubis, in: *Stern* v. Nr.32 1999)（私はアウシュヴィッツにも、マイダネックにもソビボールにも行きましたが、ただトレブリンカだけは行ったことがありません。父がそこで殺されているのです。ドイツ・ユダヤ人評議会議長イグナッツ・ブービス）

Über den wahren Charakter der Natiz wußte mein Vater **zu wenig**, und von den unsäglichen Verbrechen, die kommen sollten, ahnte er **so gut wie nichts**. (Weizsäcker)（ナチスの真の性格につては、父はあまりにも知らなさすぎたし、その後なされることになった、

言語に絶する犯罪のことは、いわば予感していませんでした。ヴァイツゼッカー)

Wenn die Parteien die Lösung der Probleme den Streit gegen die Konkurrenz unterordnen, wenn sie die Fragen der Zeit zu Instrumenten im Kampf um die Macht entwerfen, ja, dann leidet ihre Glaubwürdigkeit. Aber das schadet nicht nur ihnen, sondern uns allen. Denn einen Ersatz für sie gibt es **nicht**. (Weizsäcker 1990) (政党が諸問題の解決を競争に対する闘いに従属させるとき、政党が時代の諸問題を権力闘争の道具として企てるとき、もちろんそのときは、政党の信頼性は損なわれます。しかしそれは、政党を傷つけるばかりではなく、私たち全員を傷つけます。というのも、政党に取って代わるものは、存在しないからです。ヴァイツゼッカー、1990年)

Man kann die historischen Bedingungen analisieren, die Voraussetzungen klären, aufgrund derer die Nazis die Vernichtung der Juden und Zigeuner Europas betrieben haben, aber erklären läßt sich Auschwitz **nicht**. (Brauman 1995) (ナチスがヨーロッパのユダヤ人とチゴイネルの絶滅を駆り立てた歴史的な諸条件を分析し、諸前提を解明することは出来るが、しかし、アウシュヴィッツを説明することは、出来ないことだ。ブローマン)

5. 2 レーマとして、従属の接続詞、関係代名詞

Wir sind – metaphysisch – alle an diesen Verbrechen schuldig (wobei 〈all〉 das Ausland einschließn könnte): Wir lebten zur Zeit der Verbrechen, wir verhinderten sie nicht, wir überlebten. Moralisch sind wir schuldig, ***sofern*** wir uns als je einzelne eine Beteilung an ihnen und am Regime der Verbrechen vorzuwerfen haben. Politisch sind wir 〈schuldig〉, ***insofern*** wir als Besiegte für das im Namen Deutschlands Getane haften. Nur im Sinne solch politischer Haftung besteht eine auch von außen feststellbare Schuld aller Deutschen. (Richard Matthias Müller, 1994) (我々は一形而上学的に言って一全員がこれらの犯罪に対して罪を負っている――「全員」という言葉で外国も含みうるであろう――、つまり、我々は犯罪の時代を生きたのであり、我々は諸犯罪を阻止しなかったのであり、我々は生き残った人々なのだ。道義的に我々が罪あるのは、我々が諸犯罪と犯罪者たちの国家体制への参加をひとりびとりが非難せざるを得ない限りのことである。我々が政治的に罪あるのは、我々が敗戦国の国民としてドイツという名の下でなされたことに対して損害賠償責任を負っているかぎりのことである。こういった政治的な責任という意味においてのみ、すべてのドイツ人の、外部からもまた確定可能な罪が成立する。リヒャルト・マティアス・ミュラー)

Wir sind alle	**– metaphysisch –**	an diesen Verbrechen schuldig.
	:	
	Wir lebten zur Zeit der Verbechen,	
	wir verhinderten sie nicht,	
	wir überlebten.	
ϕ	**Moralisch sind wir schuldig,**	***sofern*** wir uns als je einzelne eine Beteilung an ihnen und am Regime der Verbrechen vorzuwerfen haben.
ϕ	**Politisch sind wir schuldig,**	***insofern*** wir als Besiegte für das im Namen Deutschlands Getane haften.
ϕ	**Nur im Sinne solch politischer Haftung**	besteht eine auch von außen festbare Schuld aller Deutschen.

：テクストは、ヤスパース著『罪責問題』の要点を抽出したもの。ちなみに、その妥当性に関して一言すれば、過不足のない要点が出されていると判断する。「テーマ・レーマ関係」としてどこ「まで」を包括すべきかという問いに対して、この分析のような回答を提示する。つまり、「道義的に我々が罪あるのは」までを包括するのであり、「副文」である「sofern」以下が、言いたいこと、つまり「レーマ」である。しばしば指摘される、「ドイツ語ハ「副文」ガ重要」という示唆は、このような「テーマ・レーマ関係」に対する「レーマ」としての

「副文」のことに他ならない。

Freiwillig ist unser Tun, ***wenn*** es weder durch Gewalteinwirkung erzwungen ist noch aufgrund von Unwissenheit um die relevanten Fakten des Falls erfolgt. - - - - - Elementarbedingung von Verantwortung ist also Handlungsfreiheit, ***die*** man vorliegt, ***wenn*** es uns möglich ist, uns auch anders zu verhalten, als wir es tatsächlich tun. (*Staatslexikon* 《*Verantwortung*》 7. Aufl. 1989) (我々の行為が自由意志的であるのは、その行為が暴力によって強制されることもなければ、重要な事実の無知にもとづくことなく、生じるときである。…責任の根本条件はしたがって、行為の自由であり、それは、我々が実際に行動するのとは違ったように行動することが我々に可能であるときである。『国家事典』「責任」第7版、1989年)

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
ϕ	**Freiwillig ist unser Tun,**	***wenn*** es weder durch G.erzwungen ist Noch aufgrund von Unwissenheit um die relevanten F.des F. erfolgt.
Elementarbedingungen von V. ist also	Handlungunsfreiheit,	***die*** man vorlegt, ***wenn*** es - - - - - - .

：第一文は、Freiwillig ist unser Tun dann, wenn として、書き改めることが可能なことは、周知のとおりであり、「主文」中に必ず言うdannによって、後続詞wennとのあいだに「関係」が作られるのである。我々は、《wenn／dann》のみならず、このような《dann／wenn》までも、「テーマ・レーマ関係」であると包摂したいのであるが、この点は、今少し保留して、検討対象とする。

「関係代名詞」による「名詞」への付加という形で、「レーマ」を呈示することは、重要な技法であろう。

Frei ist demnach..***ein Tun, das*** aus Absicht oder Überlegung resultiert, frei ist aber ein Tun ***auch dann, wenn*** es nicht zielbewußt oder überlegt geschieht, aber der Täter zu Zielvorstellung, Überlegung und Entschluß und damit zu diesem oder einem anderen Tun befähigt gewesen wäre. Neben unkontrollierbarem Zwang und Gewalt kann Unwissenheit entsprechend verantwortungsentlastend ***nur*** sein, ***wenn*** jemand in unverschudeter Unkenntnis der Umstände oder Folgen etwas tut, was er bei ihrer Kenntnis nicht tun würde. (ibid.) (したがって行為が自由であるのは、その行為が、意図と熟慮から結果として生じているときであり、しかも或る行為が自由であるのは、目標を目指したり熟慮されることなく起こるときであり、犯罪者なら目標の表象、熟慮、決断が、したがってまた、あれこれの犯行が出来る能力がある場合である。制御不能の強制力と暴力以外に無知が責任の負荷を取り除くことになるのは、誰かがもし知っていたならばしないであろうことを、事情や結果を知らないままにするときだけである。『国家事典』「責任」1989年版)

：ein Tun, das による「レーマ」、ein Tun auch dann, wenn による「レーマ」、nur (dann) sein, wenn による「レーマ」が、文の可能性追求であると言えようか。

Man lernt eine Fremdsprache am besten sprechen, <u>wenn</u> man ohne Rücksicht auf Fehler möglichst viel redet. (外国語を話すのを最もよく学べるのは、間違うことを怖れずに出来る限りたくさん話すときだ)

<u>Eine gute Verwaltung erkennt man</u> **daran, *daß*** sie auch unpopuläre Maßnahmen nicht scheuen. (良い行政かどうか分かる<u>のは</u>、不人気な措置をもいとわないことに照らして<u>である</u>：「テーマ・レーマ関係」ヲ明確ニスル訳文。良い行政かどうかは、不人気な措置をもいとわないことに照らして分かる)

Einen guten Deutschen erkennst du **daran, *ob*** er dafür ist, daß der 8. Mai ein Tag der Befreiung gewesen ist. (Heinrich Böll). (良いドイツ人だと君が認識できるのは、その人が5月8日が解放の日であるということに賛同するか否かに照らしてである。ベル)

ここまで分析をすすめてくるならば、「5・2」で取り上げたsofern, insofernをも、「レーマ」としてではなく、「テーマ・レーマ関係」へと含めて考える方が、「テーマ・レーマ関係」がいっそう明確になるであろう。したがって本節もまた、daran, /daß; daran/obに対して、「テーマ・レーマ関係」を析出することが出来よう。この点はさらに、今後の検討課題としたい。

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
(1.)	Man lernt eine Fremdsprache am besten sprechen, ***wenn*** man ohne Rücksicht auf Fehler möglichst viel redet.	
1. Man lernt eine Fremdsprache am besten	**dann,**	***wenn*** man ohne R.auf F. m.viel redete.
2.	Eine gute Verwaltung kann man erkennen **daran,**	***daß*** sie unpopuläre Maßnahmen sicht scheuen.
3. ϕ Einen guten Deutschen erkennst du	**daran,**	***ob*** er dafür ist,daß der 8.Mai ein Tag der Befreiung ist.

6. 1　定義に際して：文頭への「定義対象」の先置、文末での「定義づけ」

「定義づけ」に際して、文頭語として「テーマ・レーマ関係」を活用するという技法も確認しておくべきであろう。

文例：

Werkstudenten nennt man solche Studenten, die arbeiten, damit sie ihr Studium selber finanzieren können.（アルバイト学生とは、学資を自分で稼ぐために働いている学生のことだ）

Er kommt nie pünktlich. Er hält auch nie sein Versprechen. So etwas nenne ich denn Schlamperei.（彼は時間どおりに来ることは決してない。彼はまた、約束を守ることも一度もない。そういうのを私は、だらしないというのだ）

Situationen wie die,daß ich immer in Situationen, daß ich nicht ohne Kampf und ohne Leid leben kann, daß ich unvermeidlich Schuld auf mich nehmen, daß ich sterben muß, nenne ich ***Grenzsituationen***. (Jaspers: *Philosophie. Band II*, Heidelberg 1956, S. 203)（私がいつも状況のなかにいること、闘争なくしては苦悩なくしては生きられないこと、不可避的に罪を担うこと、死なざるを得ないことといった諸状況を私は、限界状況と名づける。ヤスパース）

In der Erscheinung nenne ich das, was der Empfindung korrespondiert, die Materie derselben, **dasjenige** aber, welches macht, daß das Mannigfaltige der Erscheinung in gewissen Verhältnissen geordnet werden kann, nenne ich ***die Form der Erscheinung***. (Kant: K. d.r.V., A.20, B.34)（現象において感覚に対応するものを現象の質料と呼び、現象の多様性がある種の関係に秩序づけられうるようにするものを、私は、現象の形式＝形相と呼ぶ。カント）

Ich verstehe aber unter dem öffentlichen Gebrauche seiner eigenen Vernunft denjenigen, den jemand als Gelehrter von ihr vor dem ganzen Publikum der Leserwelt macht. **Den Privatgebrauch** nenne ich ***denjenigen, den*** er in einem gewisen ihm anvertrauten bürgerlichen Posten oder Amte von seiner Vernunft machen darf. (Kant 1784)（私は自分自身の理性の公的使用ということで、誰かが学者として読書界の公衆全体を前にしてなす理性使用を考えており、理性の私的使用と名づけるのは、誰かが自分に託された市民としての地位か職務において自らの理性を働かすことである。カント）

6. 2　定義と註釈に際して

Aufklärung ist der Ausgang aus seiner selbstverschuldeten Unmündigkeit. Unmündigkeit ist *das Vermögen, sich seines Verstandes ohne Leitung eines anderen zu bedienen.* Selbstverschuldet ist diese Unmündigkeit, *wenn die Ursache derselben nicht am Mangel des Verstandes, sondern der Entschließung und des Mutes liegt, sich seiner ohne Leitung eines zu bedienen.* Sapere aude! Habe Mut, die deines eigenen Verstandes zu bedienen! ist also der Wahlspruch der Aufklärung. (Kant)

7．必要語としての「指示的強調語」

Ich hoffe (darauf), daß die Arbeit bis heute abend fertig ist. darauf: fakulativ（随意）

Daß die Arbeit bis heute abend fertig ist, ***darauf*** hoffe ich. darauf: obligatorisch（義務）

Wir haben lange darüber diskutieren, ob wir

seinen Vorschlag ablehnen sollen oder nicht.

Ob wir seinen Vorschlag ablehen sollen oder nicht, ***darüber*** haben wir lange diskutieren.

8. *darum, deswegen*「指示的強調」

Ich konnte heute nacht kaum schlafen. ——Ach, **darum** bist du so schlecht gelaunt.（昨夜はほとんど一睡も出来なかった。——ああ、だからなのか、そんなに不機嫌なのは）

Warum bist du nicht gekommen? ——**Darum!**（なぜ来なかったの？ ——なぜでもよ。（どうしてもこうしてもないよ）

"Unmöglich!" fügte sie hinzu. "Warum?" "Warum? Weil der Weg zu weit, **darum**." "Wie weit?" "Eine Stunde für Sie." (Rinser)（「とても不可能ですね」と、彼女は付け加えた。「どうして」「どうしてだって？ 道が遠すぎますよ、だから」「どれくらい」「あなたの足だと一時間はかかるわ」。リンザー）

Es war die Zeit des Briefschreibens, das heute durchs Telefonieren ersetztist; leider, **schon deshalb** leider, ***weil*** so viele Freundschaftbeziehungen nie schriftlich fixiert und so der Nachwelt verlorengehen werden. (Böll)（それは、手紙を書くことがあたりまえの時代だった。今日では電話がその代用品になってしまったが、残念なことだ。数知れぬほど多くの友情の吐露が一度も文字に書き留められることなく、したがって後世にも伝えられることがないという、その理由だけでも、残念なことだ。ベル）

9.「テーマ・レーマ関係」としての Doppelpunkt（二重点）

これまで何度か出て来たが、「二重点」にも、「テーマ・レーマ関係」を認めることが出来る用法が見られる。二つか、それ以上の内容的に併行した文章を言う場合、「コンマ」にするには、密接しすぎており、だからといって、「コロン」にするには重過ぎる場合、これら双方を併せた「セミコロン、二重点」を用いる。次のヤスパースからのテクストでは、ich weiß, daß と直ちにゆかずに、ich weiß: daß と「二重点」の採用である。間に「二重点」をはさむことで、その先にへと「心の首を延ばさせる」（英語学者佐々木高政）役割を演じさせ、とっておきの回答が「二重点」の向こう岸に用意されているというわけである。

Wenn es geschieht und wenn ich dabei war und wenn ich überlebte, wo der andere getötet wird, so ist in mir eine Stimme, durch die ich weiß: daß ich noch lebe, ist meine Schuld. (Jaspers: *Die Schuldfrage*, 1946, S.48)（そのことが起こるとき、そして私がその場に立ち会ったとき、そして他の人が殺されて私が生き残ったとき、そのときには、私の内面で或る声が発せられ、その声を通じて私は知る、つまり、私が今尚生き長らえていることが、私の罪であると。ヤスパース）

テーマ	テーマ・レーマ関係	レーマ
ϕ	**Wenn** es geschieht und wenn ich dabei war und **wenn** ich überlebte, wo der andere getött wird,	
		,***so*** ist in mir eine Stimme, durch die ich weiß
	:	
	daß ich noch lebe, ist meine Schuld.	

Und wie es in der Geschichte zu sein pflegt, wir haben damit nicht nur ihnen Leid angetan, sondern mehr noch uns selbst: wir haben mit der Totalität so abgerechnet, daß wir ihren Keim in das eigene Handeln aufgenommen haben und so auch in dieeigene Seele, was uns kurz darauf grausam zurückgezahlt wurde in der Form unserer Unfähigkeit, einer anderen und von anderswoher importierten Totalität entgegenzutreten. Ja. noch mehr: manche von uns haben ihr aktiv auf die Welt geholfen. (Vaclav Havel 1990)（そして歴史においてはよくあることですが、私たちは彼らドイツ人を傷つけたばかりではなく、それ以上に私たち自身を傷つけたのです。すなわち私たちはナチズムの全体主義と決着をつけるのだとして、全体

主義の萌芽を私たち自身の行為の内部に、こうして私たち自身の魂の内面へと引き受けたのであります。このことは、もうひとつのどこか余所から輸入されたスターリン主義という全体主義に対して対抗する能力がないというかたちで、その後すぐに跳ね返ってきました。それどころかもっと言えば、私たちの多くが新たな全体主義が世界に誕生するのに手を貸したのです。ヴァーツラフ・ハヴェル 1990年3月15日)

Beidem wollte ich mich stellen: dem Verstehen und dem Verurteilen. Aber beides ging nicht. (*Der Vorleser*, S.153) (両方に私は対峙しようとした。つまり、理解することと、裁くことである。しかし両方はだめだった。ベルンハルト・シュリンク)

Den Herrn der Geschichte wird er (der Gottesbegriff) dabei wohl fahren lassen müssen. Also: Was für ein Gott konnte es geschehen lassen? (Hans Jonas: *Der Gottesbegriff nach Auschwitz*, 1984) (歴史の主宰者をして神概念は、経験させることになるであろう。したがって次のように問うことになる。即ち、どのような神がアウシュヴィッツが生起するままに放置することが出来たのかと。ハンス・ヨーナス)

結　論

1．文頭語に関して、新規の「テーマ」が「不在・欠如」で、「テーマ・レーマ関係」が出現していることは、充分に強調してよいことで、強調してもしたらないものである。これは、教授法としても、従来のドイツ語教育を、初級段階から一新させる可能性がある。

2．「wer／der ; wer／dem ; wer／den, was／das」(また、旧来は、Wenn／dann ; wenn／so Sätze と称されていたもの) が優れて明示的に「テーマ・レーマ関係」を表出する例として存在する。

3．レーマとして呈示される部分が、更に究明の余地がある。

4．「dann／wenn, dort／wo, daran, das, deswegen (deshalb), weil」も包括可能か否か、という問題が残存する。

5．「Es gibt, es geht jemandem um」の「地平・焦点関係」、「テーマ・レーマ関係」の特殊形の分析、また、テキスト分析への展開は、今後の課題とする。

主要参考文献

Harald Weinrich: *Textgrammatik der deutschen Sprache*, Duden Verlag 1993

Halard Weinrich: *Sprache in Texten*, Ernst Klett Verlag1. Aufl. 1976

新田春夫『放送大学教材ドイツ語Ⅱ (1998)』日本放送出版協会 1998年

石光泰夫『放送大学教材 ドイツ語Ⅲ (1997)』日本放送出版協会　2000年 第2刷

関口存男『独作文教程』三修社 1978年 第16版

関口存男『冠詞』三修社 (Ⅰ—1984年第9版, Ⅱ－1985年第9版、初版は、1961年、Ⅲ－1984年第9版、初版は、1962年)

Bruno Snell: Die Entdeckung des Geistes, 3. Aufl. Classen Verlag 1955 ブルーノ・スネル『精神の発見』新井靖一訳、創文社　昭和49年

Bruno Snell: Der Aufbau der Sprache, Classen 1952 ブルーノ・スネル『言語・詩学・哲学——三分法による言語の解明——』新井靖一、大修館書店 1978年